

自由間接話法

たなか踏基

同人誌「えぞうぶ」の縁は誠に不思議な縁である。平成十七年八月三十一日、朝八時新宿発、スパーあずさ五号で松本に向った。友人の高橋君が出迎えてくれて、源智の井戸端の守屋君の店に案内してくれた。私が「駅に着いたら歩いていく」と電話で伝えたものだから、不案内の私の身を心配して駅頭で待っていてくれたのである。

早速、守屋君運転で高橋君と便乗して、木曾桑崎の山荘に向った。もちろん一人とも「えぞうぶ」仲間であった。私の安曇野を舞台にした小説「奇妙な猫たち」の序文執筆のお願いを兼ねて、木曾谷旧榎川村桑崎の山荘滞在中の、ジャーナリストの梅本浩志氏を訪ねるためである。

梅本氏一家が、高校の友人守屋義雄君の山荘（元分教場改造）に、毎年夏滞在するようになった。それからもう十年余になるといふ。その日も、横浜から奥様と息子さんの三人連れで来木曾していた。「島崎こま子の『夜明け前』」の著書巻末でもこの山荘での滞在の様子が記されている。

私は、今回出かけに二つの忘れ物をした。一つは名刺入れ、もう一つは折角充電までしたデジカメの記録媒体「メモリースティック」である。私は目下、「奇妙な」シリーズ第三作「奇妙な紀行文」といふ、木曾街道舞台の推理小説を執筆中であった。出会う人々との交換挨拶時の名刺と、訪れた場所の記録のための二つの道具を忘れたのである。作家として失格の失態である。

国道19号線を離れて、これでも観光地か、木曾の山道かと思われる未舗装の凸凹悪路を登ること十五分、学親会という看板のある山荘に辿り着いた。車中守屋君の説明では、三十人程

の学童を日出塩の駅から引率して、廃校となつた分教場跡で、夏合宿を毎年やっていた場所だといふ。今や放牧を企てて頓挫した住民達は全員すつかり山を降りて、僅かに頂上付近に茸小屋の住人が一人いるのみであるといふ。

草原ばかりの向こうに、分教場跡の建物が観えた。場違いの場所に、牧草を蓄える予定で建設した、二基の大きな廃サイロが広場入口にあった。やれやれの思いで車から降り立つと、白髪頭の梅本浩志氏がそこにいた。一家は総出で、横浜ナンバーの愛車の上で蒲団を干していた。

私は持参の執つて置きの大吟醸酒の栓をあけた。野外に置かれた簡単な椅子とテーブルに腰掛け、イカの燻製を肴に、梅本氏と二人で歓談しながら、奥様の用意したくれたコップで杯を傾けた。

私は梅本氏の「島崎藤村とバリ・コミュニケーション」なる近著を以下の補足付で戴いた。「島崎こま子の『夜明け前』の姉妹本であるらしかつた。

「本の最終校正時にも気付かず、一箇所だけミスをやってしまった。唯普通の読者は気付かないであろうが……仏文専門の学者は気付くかもしれない……」と残念そうであった。

二人の話題は専ら事前に送付した、私の出版用の原稿二葉と前著「奇妙な喫茶店」に及んだ。

最所、同席の守屋君と高橋君だが、私と梅本氏の話が小説や評論談義で佳境に入ってくると、買物に行くといつて車で山麓まで降りていった。気を利かせてくれた二人の好意が嬉しかった。

梅本氏の博識と鑑賞力は、素晴らしいものがあった。コメントに思わず眼を開かれる思いがした。

私が最も感銘受けたのは「自由間接話法」なる文学上の表現方式であった。それはつまり、複数人称の表記が、何時の間にか一人称になるといふ表現力であった。直ぐ名前が出てこないが、仏文

学者にその表記法を操る素晴らしい作家がいる由。私にはその意味が直ぐ理解できた。昔松岡正剛氏の講演時に拝聴した話を思い出していたからだ。

「日本語の不思議さを思つ。『われ』は一人称だが『わりや』と語気を強めて伸ばすと忽ち二人称に変わる不思議。『てまえ』も同様『てめ』とするとたちまち二人称になる」

氏はこれに似た私の文体にも触れ、読んでいる読者は恐らく戸惑つかもしれない……と指摘した。「映像の世界では、こつした表現法は良くあるのだが、文学ではたいへん難しい。たなかさんは小説家というより、自分でメガホンを執つて映像作家になるべきだった。」

まるで、褒められたのか、貶されたのか解らなかつたが、映像作家にむいていると言われたのは、生まれて初めてであった。私は高校の交友誌に掲載の自分の作品に、U(you)なる主人公に、一人称で語らせた短編があることを思い出していた。

他にも指摘苦言を受けた。「奇妙な猫たち」のクライマックスの表現が、さりと流し過ぎる……起承転結が技術屋の論文のようだ……一つのパラグラフが長すぎる……もっと読み手に読み易く改行を多くした方がよい等、歯に衣きせぬ氏の指摘に得る点多く、私にとって貴重な体験だった。

氏との会談中、唯一人の山頂の住人から貰つたという、胡瓜の漬物が美味かつた。携帯電話も繋がらない峪关合いの山荘は、深い緑の懐に抱かれ、正に木曾の冷気を満喫するには絶好の場所であった。「夏でも寒い、よいよいよい」と囁す木曾節の一節どうりの廃校の分教場での一時であった。

守屋君と高橋君が買物をして戻ってきた。皆で、塩尻で購入したという羊肉のジンギスカン料理をつついて食事した後、梅本氏一家を残してその日はその場を辞したのである。了